

〔資料〕

業務報告にみるコチア産組の経営実態

進 藤 賢 一

前 林 和 寿

(1) はじめに

ブラジル最大、いや、南米で最も規模の大きいコチア産業協同組合中央会の、1989年度の業務報告書を入手することができた。この業務報告を通してブラジルにおける農業協同組合の業務内容の分析が可能で、日本の協同組合との比較もでき、ブラジルの最近の農業事情を知ることができる。

外国の諸地域の産業、経済事情をみようとしても資料の制約と限定から、全体像を知るためには、かなりの時間を要しざるを得ない。

地域分析には、資料蒐集が不可欠に重要なことは論をまたないのである。1989年のブラジルには、大きな変化があった。それは、大統領を直接選ぶ権利から遠ざけられていた国民が29年ぶりに直接投票する機会に恵まれたのである。つまり、軍政から民政への移管が、この年行われたことだ。

しかし、経済面で、すぐに変化がおこるものではない。プラーノ・ヴェロン（夏の計画）により物価が凍結されたものの、インフレの原因は解消できず、1989年後、1か年のインフレ率は1,765%と高水準で推移している。

インフレ防止策の一環としてなされたデノミネーション（1,000クルザードスから、3個のゼロを切捨て1クルザード・ノーボとする）で、物価・給与の凍結のみでなく、公債の調整規則も定められた。

サルネイ大統領は、メジダ・プロヴィゾーリア（緊急政令）を発し、経済、財政、社会政策上の処置を実施すべく請懸案を国会に提出したものの、思うような成果はあがっていない。

従って、プラーノ・ヴェロンの実施にも拘わらず、わずか半年後の'89年6月には、消費者物価指数（1PC）が24.8%になったのを皮きりに、毎

月インフレが続き、年末累積率は1,765%に達した。

貨幣価値は急速におち、輸出は低迷、市場での外貨が急騰して、国内通貨クルザード・ノーボの価値が下落している。

しかし、悲観すべき状況ばかりではない。他方では、雇用水準がある程度安定的に維持され、電力など生産手段の水準も落ちず、国民総生産（PIB）も2－4%の伸びを予測するなどの面がではじめた。

民政による大統領は、サルネイに変わり、フェルナンド・コロール・デ・メロと決定、これは当然との見方もあるが今後のカジ取りは容易ではない。

農業面での状況はどうか。

以上のような、ブラジル経済の状況変化のなかで、農産物の価格がインフレの進行に伴わなかっただけでなく、農業に対する政府の援助が事実上停止されたに等しく、農民の生産意欲が減退、農業融資に高い市場利子が課せられたため、農業の展開は、極めて高いリスクを伴う産業になってしまったことがあげられる。

端的に言えば、制度としての農業融資が終焉したため、農業者は、高率の市中銀行等の金融に手を染めなければならなくなったのだ。

これでは、債務は雪ダルマ式となり、農家が倒産の危機に見舞われる可能性が一段と強まることになる。

'89年は、気象条件も悪く、収穫量も当初の予想を下まわったところが多い。この天災異変に加えて、ブラジル農産物は、輸出向けの商品が多く、国際市場価格の変動という二重の不確実性があり、見切りをつけられた制度保証は、今後ブラジル農業に苦しい局面を押しつけることになるだろう。

こうした状況のなかでは、企業的に効率よく農業展開を行うか、協同組合の傘下での信用事業に依存すべき体質を生み出すか、資金力、資産力のある者が農業に携るしか、方法はない。

産業組合レベルの、農業信用の重要さが改めて強調されてよいのである。

ここでは、業務報告書にみるコチア産業組合の経営実態を分析し、産組を通じてのブラジル農業を概観しておく。

(2) コチア産組の事業内容

1989年度の総コチア産業組合の総合事業費は30億1,701万5,114クルザード・ノーボ(以下NCz\$)で、前年度に比較し1,227%の伸び、これは、むろんインフレ率が織りこまれての数値である。

部門別にみると、生産物販売が58%、資材配給が42%、前年度は57%、43%でこの比率に大きな変化はない。

下部組織は、サンパウロ州、パラナ州を中心に、マツグロッソ、リオ、ミナス、東北など10単組、本部直属グループが1、その下にある部落数は、北パラナ単組の22部落を匹頭に、その数90、である。組合員数は17,417名。

併設機関としては、金融を司る「農業信用組合」(CRCR)は農業銀行、「コダイ不動産開発」、かつてはコチア産組にかわって生産物の加工や関連分野への投資を行っていたが、法改正で、不動産業に転向したものだ。「アグロフローラ」は蔬菜種子栽培と販売、コチア産組が75%出資、他は南米銀行、プロミソール、コダイによる資本構成になっている。ブラジルではアグロセーレスと並ぶ業界のトップ企業である。「コンコルジア保険」は農業保険のみでなく、一般保険も取扱う。全農系共栄火災社長の提言ではじめられた日伯合弁会社、出資比率はコダイ34%、共栄と東京海上がそれぞれ33%ずつ。「イルパーザ工業」はパラナ州ロンドリナ市近くのイビポラン郡にある食用油の会社、大豆油の生産をしているが、もともと、地元ブラジル人経営の工場をコチア系、コダイ、アサイ綿花が買収した。「リセイヤ商事」は一般の仲買商で、他の組合から農産物を購入、コチアの得意先に販売するいわば商事部門でサンパウロ市にある。このほか「コチア農畜コンサルタント」「民間社会保険会社」「体育クラブ」「農業高校」など、コチア独自の協同組合機構を構築している。以上は傍系企業であるが、組合員の農畜産事業に直結する部門は、次のようになっている。

「販売ポスト」、「精綿所」、「紡績工場」、「コーヒー精選所」、「飼料配合所」、「プレミックス工場」、「肥料工場」、「燐酸工場」、「製茶工場」、「種子精選所」、「農事試験場」、「展示圃場」、「シーロ＝倉庫」、「穀物保管倉庫」、「資材販売店」、「スーパー・マーケット」、「鶏卵自動洗浄・選別所」、「馬鈴薯選別倉

庫」、「屠殺場」、「種鶏場」、「孵化場」、「普通生産物加工場(馬鈴薯、蔬菜、果実、滅菌液卵、粉卵)」、「蔬菜、果実選別所」、「共同出荷組合」、「海の家」、があり、コチア産組直営事業所となっている。

外国における輸入代理店として、ヨーロッパ市場での組合員生産物の販売と、基礎資材、特に、種薯輸入の機関として、オランダのアムステルダムにベラグロ社、アルゼンチンのブエノスアイレスに、果実、蔬菜輸出の代理商を置いて、コチア産組が直接外国貿易の窓口としている。

ブラジル 25 州のうち、組合員は 17 州に分散しているので、各地から集荷される農畜産物に卸売市場 (CEASA) を、全伯 19 カ所に配置、集荷と販売事業を展開する。農畜産物は 200 種以上、生産量は 250 万 t を供給、組合員、その家族、扶養者、直接、間接の使用人を含めた、CEASA 関連者は 30 万人にのぼる。

こうしたコチア産組の、営業実態を検討しておきたい。

(3) 普通生産物の生産、供給の状況

コチア産組が、馬鈴薯 (バタタ) 組合として創立した背景からしても、今日、この部門は極めて重要な位置にある。しかし、生産性からみて、この 3 か年は、気象災害や価格変動で、危機と損害の年次であり、生産者の資本減少もおびただしく、作付面積にも影響がでている。

もともと、耐冷救荒作物の性格はなく、投機性の強い作目部門で、横ゆれの大きいものであるが、このところ状況は悪い。

'89 年度の組合への入荷量は、60 kg 俵で 350 万 7,125 俵、前年度比 4.7% 増、販売総額で、NCz\$ 1 億 6,100 万であった。

89 年 1 か年の中を 4 区分してみても、変動の激しかったのが、この馬鈴薯部門であった。

第 1・4 半期は、価格が凍結されていながらも、生産は過剰気味で推移した。第 2・4 半期は、生産過剰の危機感から、作付面積が落ちこみ、供

給量が減ったが、逆に、価格は好転した。第3・4半期は、インフレ激化とともに、国民の購買力が低下し、価格も低迷、その後、水銀汚染問題が発生、消費量が30%低下、価格も40%落下といった結果に見舞われ、馬鈴薯生産者に痛撃を与えた、といってよい。水銀が、農薬に含まれていたとして社会問題化したのである。

こうした状況の中で、コチア産組は、施設投資などを、わずかに選別倉庫の拡大のみにとどめ、リスク回避の方針を貫いてきた。

’89年度、蔬菜部門の販売額はNCz\$ 1億3,390万で、馬鈴薯部門に次いで、第2位、前年度比は1.29%の増加で、比較的順調に伸びた。

三大生産物は、トマト(トマテ)、ピーマン(ピメントン)、ニンジン(セノウラ)で、全体の54%、その他キャベツ(レポーリョ)、赤ビート(ベテラーバ)、レタス(アルファッセ)、アルカショフーラ、こしょう(ペピーノ)、花野菜(コウヴェ・フロール)、はせとうり(シュシュー)、ナス(ベリンジェラ)などがある。

’88年次末に、組合員の生産物の中で、生産量、消費量とも大きいものを基幹作物として取扱い、生産性と収益性を向上させる。“プロジェクト、DCPH”を実施し、蔬菜、果実の全組合員を、このプロジェクトの対象として、説明、指導を行い、生産計画の問題点を折出し、災害防止などの方法を検討したことが、いくらかなりとも役立った、としている。

表1 主な蔬菜の販売額

(単位 NCz\$)

トマト(トマテ)	4904万3000	アポーボラ各種(南瓜)	429万3000
セノウラ(ニンジン)	1412万1000	レポーリョ(キャベツ)	327万8000
ピメントン各種(ピーマン)	954万6000	ベテラーバ(ビート赤)	314万6000
アルファッセ各種(レタス)	818万8000	アルカショフーラ(アートチョーク)	272万2000
ペピーノ各種(胡瓜)	590万6000	コウヴェ・フロール(花野菜)	261万8000
シュシュー(はせとうり)	431万8000	ベリンジェラ(ナス)	150万9000

(コチア産組 89 年度事業報告書)

“DCPH”の実施は、生産物の選別、事務処理の機械化、生産物の出荷契約、約定、出荷計画、CEAGESPでの受け付け時間の励行などの面で合理化を行ったのである。

輸出を含めた果実の販売総額は、NCz\$ 2 億 8,630 万で、主な取扱い品目は、下記表 2、但し、ブドウ（ウーヴァ）が 37% でトップ、パパイヤ（マモン）、リンゴ（マサン）の上位 3 品目で全体の 54% の取扱い量である。

ブドウもいろいろ種類があるが、ネオマスカットに似たウーヴァが多く、パパイヤはブラジルを代表する果樹、りんごは、かつてアルゼンチンなど冷涼な地域からの輸入量が多かったので、高級果実として珍重されていたが、近年はアルゼンチンやウルグアイに近いリオ・グランデ・ド・スル州やサンタカタリーナ州で栽培されるようになってきた。

コチア産組としては、馬鈴薯、蔬菜とともに果実は、最も重視している部門であり、日系人農場での作付比率が高い部門でもある。

果実の出荷は、生産物出荷約定制をとり、市場調査に基づいて仮締切り

表 2 主な果実の販売額

(単位 NCz\$)

ウーヴァ（ブドウ・名柄）	1億0451万7000	アバカシー（パイナップル）	862万1000
マモン（パパイヤ）	2954万5000	ゴヤーバ	835万4000
マサン（リンゴ）	2069万1000	ウーヴァ（ブドウ・普通）	755万7000
メロン	1943万7000	メランシア（西瓜）	507万3000
ペッセゴ（桃）	1604万6000	アバカテ（アボガド）	463万8000
マンガ（マンゴ）	1550万7000	アメイシャ（スモモ）	446万0000
バナナ	1229万2000	ラランジャ（ミカン）	413万3000
ネクタリーナ（毛魚桃）	309万4000	カキ	238万9000
マラクジャー	278万1000	モランゴ（イチゴ）	172万2000

(コチア産組'89年度事業報告書)

をして選別、後に最終勘定する計算方式（ポイント・アツリブイード制）を実施している。

この年は、ブラジル東北部で、時期はずれの早期雨期となってブドウの品質が落ち、パパイヤやメロンも異常気象で被害があったり、りんごに殺虫剤“デュフォール”が残存していると、社会問題化して、売り行きが伸び悩むなどの影響がでたが、全般的には平年なみだった。

大都市域での選果場の充実や予冷、保冷库の拡充で、国内市場が伸びミナス・ゼラエス州、ゴヤス州、ブラジリア方面の諸都市での販路が拡大していった。

小家畜の養鶏部門は、食鶏、卵鶏、液卵、粉卵からなりたち、中家畜部

門は養豚，大家畜部門の取扱いはない。酪農，肉牛などは含まれていないのである。

養鶏部門は，日系農家でも，土地所有が狭小な零細生産者間に，幅広く展開する。^(註1) 経営規模は小さくても高生産力が保証できる部門なのだ。コチア産組としては，組合員から安定的に生産物を供給できる立場にある。

食糧は，国内市場のみでなく，外国市場にも流れる商品の役割を荷っている。

産組直営のバストス屠殺場では，奪骨加工室が始動しているが，ここでは，日本の伊藤ハム KK との契約で，「やきとり」「てばなか（手羽中）」、「切り身」その他，単なる屠体，脱毛，中ヌキのみの加工でなく，一杯飲み屋，やきとり屋で直接利用できる方式に加工，処理し，日本向けとしているほか，ブラジル国内用として「鶏肉ハンバーグ」の加工も手がけている。

1 月施行の「夏の計画（プラーノ・ヴェロン）」は，屠殺鶏の価格を生産コスト以下で凍結したが，このリスク分は，支払期限の短縮，利幅の大きい生産物の販売促進で補い，マーケティングにも変化を与えて乗り切ろうとし，ある程度成功をおさめている。そして屠殺鶏，生鶏，解体鶏，臓物の'89 年度販売高は NCz\$5,770 万で，前年度を上まわる実績とした。

鶏卵は 7～10 月に，供給過剰による市場での不安定さを露呈したが，“プレッソ・フェシャード制”（価格先決め）で，乗り切り，8 月には，スーパーマーケット網の「カレフル」と共同して，荷役作業のスピード化のため，油圧式プラットフォーム“オヴェコンテナー”をつなぐ方式を採用，パペロン容器（ダンボール）を節約し，消力化と品傷みを解消，生産物の移動をスムーズ化した。

グワタパラなど，各地での自動洗卵選別所では 1 ダース単位での半自動包装方式を導入，集卵車に油圧式プラットフォームを取りつけ，鶏卵用バンデージャによる月 45 万個の処理などで，市場競争力をつけた。この結果，売上高は NCz\$9,760 万で，これも食鶏同様，前年度実績を上まわるなど，好調な業績があがった。

液卵，粉卵は，ブラジル三井 KK と，卵白の液卵輸出契約を結び，日本

向け輸出を可能にしているが、特に養鶏諸部門では、今後のターゲットを日本にしぼる傾向がでてきている。

他方、国内では、サルトにある液卵製造工場を拡大、3台目の破卵機を導入、生産能力を1カ月当り500 tと43%上昇させた。また、'89年度からは、卵白と卵黄を分離して、粉卵加工を開始、発売するとともに、7月には、FISPAL(ブラジル食品博覧会)に出品して、新商品をイメージづけた。売上高はNCz\$1,870万に上昇した。

豚についてみると、6～9月に、輸入品が市場に流れこみやや低迷したが、豚価々格が、牛肉価格の上昇のあおりを受けて、値上りし全般的に、養豚農家も、産組も収益性が大きであった。

コチア産組直営の「農事試験場」も、'88年には、肥育用子豚900頭を生産したにすぎなかったが、89年は5倍近い4,300頭生産、この部門での売上高をNCz\$880万としたのである。

コチア産組では、アーリオ（にんにく）、セボーラ（玉葱）、種薯も普通生産物の範疇のなかで取扱っている。

国内需給調整の意味から、政府は農畜産物の輸入と国内生産との調和をはかり、市場安定させるため、'88年下半期にアーリオの輸入を禁止した。これを受けて、国内生産者の作付意欲を刺激したが、第2・4半期には、輸入解禁政策がでるに及んで、アルゼンチン、ボリビア、メキシコ産と競合、国産収量があまり増収でなかったにも拘わらず生産者の所得は向上した。

第3・4半期はゴヤス、ミナス・ゼライス、エスピリット・サントなど中伯各州でアーリオの作付けがはじまったが、面積は少なく、安価になる時期にも拘わらず、市場価格は高値安定で推移する、という結果になった。

第4・4半期に入って、サンパウロ、パラナ南部ミナスなど、南伯に近い州でのアーリオの作付けがはじまって、作付面積は伸びず高率インフレのもとでも、有利な作物の地位をキープするなど、この部門は、極めて高い所得が保証されていたのである。

組合に入荷したアーリオは、前年度比、30%減でありながら、販売額は NCz\$1,560 万と、前年度を大きく上まわり、好成績をあげた。

逆に、セボーラ（玉葱）は、南伯のリオ・グランデ・ド・スル、サンタカタリーナ両州で、作付面積が拡大したが、品質が悪く、相場は下落、第2・4半期も、南伯の生産者が市場回復をねらって生産物の一部を貯蔵するなど試みたが、悪天候で、病虫害に見舞われ、価格の好転はみられなかった。

第3・4半期も、この状況は続き、最終4半期に、良質品を生産するピエダーデでの作付面積の減少があつて、市場が品不足になり、ようやく回復、価格も上昇に転じたのである。

コチア産組への入荷量は、20 kg 俵で147万874俵、販売高は NCz\$3,090 万で、前年度比で微増となった。

種薯は、“商業用”30 kg 入り 41 万 1,498 箱、“自家採取”8,826 箱で、前年度比 20%減。配給量は“商業用”31 万 9,892 箱、“自家採取”8,368 箱で合計 32 万 8,255 箱で前年度減 35%となった。

品種はビンジ・オランダエザなど 10 種ほどで、欧州からの輸入ものも入っているが、いずれも一級品で好品質ものを取扱っている。

サンパウロ、パラナ、サンタカタリーナ 3 州の種薯輸入は割当制になっているため、カノイーニャスのコチア産組直営圃場 (113.5 ha) で 5 万 686 箱の生産をあげ、各地に供給したし、パルマス圃場 (60.1 ha) での 2 万 4,504 箱は、主として、サンパウロとミナスの両州、クリスタリーナ圃場 (172 ha) の 10 万 3,700 箱は、南パラナ、サンパウロ両州に供給された。

主産地は、ボツカツ、タツイ、ピラールド・サンミゲールなどサンパウロ州。

高級薯の輸入減を補うため、組合は、茎頂培養を行い、50 万箱の種薯を、供給する態勢をとっている。

(4) 大規模栽培生産物（特殊生産物）

コチア産組は、普通生産物とは別に、大規模に栽培されている作物を、

ブラジルのメジャークロップとして分類している。

ソージャ (大豆), アルゴドン (綿花), コーヒー, ツリゴ (小麦), ミーリョ (とうもろこし), アロース (米), 茶などがこれに含まれる。^(註2)

これらの部門総体の販売額は NCz\$ 9 億 890 万で, 普通・特殊を合わせた 52%がこの部門。なお, 89 年度販売量は前年度実績を上まわっている。

ソージャ (大豆) は, ブラジルではとうもろこしに次ぐ作付面積を誇る農産物であり, 採油用が多く国際商品でもある。'88 年実績は 1,800 万 t で, アメリカ合衆国の 4,188 万も (45%) に次いで世界第 2 位, 世界の 20%を生産したとの F A O の記録があるが, '89 年には 2,400 万 t と, 大幅な増産が実現した。組合業務報告によるアメリカ合衆国'89 年生産予想は 5,300 万 t と, これまた, 大幅増が見込まれていて, 下半期にシカゴ市場の相場が 1 ブッシェル当り, 7 ドルから 5.5 ドルの水準に落下するなど, 豊作による価格暴落の動きがでたのである。

ともあれ, ブラジルの大豆生産量は, 南半球地域全体の 78%に達する量だ。

世界的, 生産過剰の動きを受けて, 生産農家は, 生産資材の利用を切り詰めるほか, 植付面積の縮少を迫られている。89~90 農年の作付面積は 7~10%減の予想だ。

しかし, コチア組合指導部と組合員の中での対応には敏速な面もみられた。常に市況に関する情報を入手し, 値崩れが予想されれば種子と交換し, 1 俵当り 15 ドルの収入を得たり, シカゴ市場の高価格期に販売するなど, 適切な対応もあったようだ。

大豆の生産は, パラナ, マット・グロッソ, サンパウロ, リオグランデ・ド・スルの 4 州が多く, 農産物輸出の面では, コーヒー豆に次いで, 大豆粕, 大豆油, 大豆 (豆) などが上位を占める国際商品である。常に国際市況を睨んでの, 生産コントロールと販売調整が要求される。

コチア産組が入荷した大豆は, 60 kg 俵で, 1,001 万 8,763 俵 (前年比 32.4%増) で, 組合の大豆産業 (大豆, 大豆油, ファレロ等) の売上げは NCz\$ 2 億 2,190 万に達した。

アルゴドン(綿花)のブラジルにおける生産量は72万tで、世界の4%、第6位の地位にあるが、輸出は生産量の1/4程度、国内紡績にまわされる比率が高く、綿花の国内消費量は世界で5位となっている。(ICAC統計)ブラジル国内での生産はセアラ、パライーバ2州で70%前後、ペルナブコ、ピアウイ、リオグランデ・ド・ノルテなど東北伯に集中する。

'88年度の綿作は、豊作で価格は低調であったが、4月から、世界5位生産国パキスタンの輸出停止、1位生産国中国の品不足、パラグアイ、アルゼンチンの気象災害で、価格が反騰し、高値安定を迎えた。国際市場も好転し、価格が上昇すると、今度は、織物業者が高い綿花を買うことになり、苦境にたたされるなどの結果があらわれた。

組合に入荷した実綿は、652万アローバ(1アローバ15kg)で、前年比減、組合の製綿所6カ所のほか、ロンドリナ、イバポーランなど4カ所を借用して製綿したのである。繰綿の販売高はNCz\$2億7,470万となった。

コーヒー生産量は、'88年123万tのブラジルが世界1、輸出も約100万tで首位の座にあるが、ブラジル国内での生産割合は減少し、国内の種類別作付面積では7~8位に転落し、かつてのコーヒー・モノカルチュア時代は終焉に向かっている。人件費に高騰と、機械化の難しさ、国際価格の変動、地力の低下など、さまざまな条件が加つてのことである。生産地も、かつてのサンパウロ、パラナ両州から北上して、ミナス・ゼライスやエスピリット・サント、ゴヤス方面へと移動してきている。

パラナ州あたりでは、抜根跡のテラローシャ土が露出している景觀によく出会う。

コーヒー2年周期説からすれば、'89~'90農年は当り年である筈なのが、89年下半期に乾ばつと栽培管理のまずさも手伝って、実績はあがらなかった。加えて、'89年、国際コーヒー価格協定が廃止となり、価格も低落、インフレや為替差損で、生産意欲が減退した農家が多くでた。

国際協定の廃止は、'88年7月3日から断行され、自由取引になったことで、量の割当、価格、売り先の制限がなくなり、見通しもつかない状況

となったのである。

輸出についていた、販売申告登録権の競売で決められていた個別割当制も廃止、12%の輸出拠金は6%に半減した。

こんな具合で、このところ、3年連続の生産減である。

'89年度に、組合に入荷したコーヒーは45万3,835俵となり、売上高はNCz\$1億730万であった。

ブラジルのツリゴ（小麦）生産と流通は、1つの問題を抱えている。

この国では、世界の小麦生産量の1.5%を消費しながら、国内生産量は0.6%にすぎないのである。半分以上は輸入に頼らざるを得ないのだ。隣国のアルゼンチン、ウルグアイからの輸入が多いのであるが、ブラジルの産地もパラナ州、リオグランデ・ド・スル州など南伯が中心。南伯での作目選択で、小麦は嫌われがちである。

'88年、ブラジル政府は、小麦に買い上げ時期を遅らせ、'89年4月にまで遅れて取引が完了した。その後、アルゼンチンとの双務協定で、大量の小麦の買い入れが決定、そのことが、小麦の政府買上げ価格の下落となってあらわれ、生産者への事態を悪化させたのである。

買上げ価格の低落は、農家をして生産意欲を減退させ、作付面積前年度比5.1%減となって表われた。

加えて、この年、西パラナの降霜とマット・グロッソの豪雨が、品質の低下を招き、収穫量でも'88年の14.5%減の490万tにとどまったのである。

コチア産組への入荷量は、1,213万3,710俵（60kg俵）で、65.3%の増加、売上高もNCz\$2億2,200万と増加した。

不況に強いコチア産組に取組みの成果ともいえる事態である。

ミーリョ（とうもろこし）のブラジルにおける生産量は、'88年のFAO年鑑によると2,500万tで3位であるが、生産比率はアメリカ合衆国、中国に遠く及ばず6%にとどまっている。

とうもろこしは、ブラジルにおける農作物の中で、最大面積を有するもので、近年急増した。その背景は、畜産振興に伴う、飼料用としての需要が高まってきていること、人件費の高騰を背景に省力化作物としてコストダウンがはかられていることがあげられる。

産地は、熱帯雨林地域を除いて、全伯に作付けられているが、特に生産量の多い地域はパラナ、リオグランデ・ド・スル、サンタカタリーナの南伯諸州で、サンパウロ、ミナス・ゼライスがこれに次いでいる。

輸出入はともに少なく、国内需要向け飼料作物の性格が強い。

しかし、最近のとうもろこし生産は東北伯で急増し、'88年は、総生産量が2,605万tに達し、アルゼンチンからの輸入を加えると、国内消費は十分に賄えている。

とうもろこしが好転している理由の1つに大豆の市況低迷がある、といわれる。大豆とならんで、この作目は大型機械化が可能で、輪作価値もあるからだ。

最近では、生産コストが高騰しているとはいえ、ここ10年間で200万haの作付増で合計1,300万haの面積が、ほぼ継続して作付けられ、生産量は'89～'90農年で2,650万tが予想されている。

組合員がコチア産組に出荷したとうもろこしは259万3,896俵（60kg俵）で、前年比2.8%増、総販売高はNCz\$3,470万である。

アロース（米）

長い間、ブラジル人の主食はマンジョーカと小麦粉パンであったが、最近では米とフェイジョン豆が、次第にその地位を高めている。

米の生産も全伯に及んでいるが、南部リオグランデ・ド・スル州やサンタカタリーナ州の水稲を除いて、陸稲（長粒米）の比率が高い。州別には、リオグランデ・ド・スル、ゴヤス、マツト・グロッソがベスト3、ミナス・ゼライス、パラナ、マラニオンが続いている。

米は、大都市住民、特にサンパウロの消費者が好むので、この地域での消費が多い。

天候異変によるリスクも多いが、大豆やとうもろこしとの輪作体系に組み入れられる性格があり、土壌を“調教する”ともいわれている。

陸稲が、全伯の80%生産されているが、品質、生産性において水稻に劣り、融資の面でも不利とされている。リオグランデ・ド・スル州のha当りの単収は3.8 tであるのに対し、マット・グロッソ州やミナス・ゼライス州のそれは1 t程度、4倍近い生産力格差がある。

国内市場では、豊作と繰越、輸入などあわせ、1,580万tの在庫で、年間消費量に1,100万tを大きく上まわって過剰気味に推移している。

組合入荷量は15万9,378俵(60kg俵)で、前年度比65%減少、販売高はNCz\$2,100万にとどまった。

茶(紅茶)、エステイラ(ゴザ)、ジュンコ(いぐさ)などは取扱い量もそう多くないので省略する。

穀類種子については、'89年度さまざまな問題が発生した。

夏作の農業融資がスムーズでなかったこと、小麦代金の分割払いを実施、大豆販売で、適正時期を逸した種子の国際取引にICMS課税が適用、輸送費の法外な値上りがあった。

コチア産組の対応は、例えば大豆の場合、植付用種子、肥料、農機その他の資材を、その後収穫する食用あるいは種子用大豆と交換する方式を採用、生産協力圃場でも、大豆とその他の種子、食用大豆と小麦を交換するなどリスク分散をはかったのである。

ロンドリナでのとうもろこし種子、バレイラスのフェイジョン種子は、改良面で大成功をおさめた、と述べている。

種子を安定的かつ良質のものとして組合員に供給するためには、種子精選所の設置が不可欠だ、として、小麦、大豆を扱うドウラードス、大豆のみ扱うパラカツに新規にこれを設置した。加えてロンドリナ、バレイラス、カストロの精選所も拡充したのである。

89年度、小麦種子受付量は45万2,974俵(60kg俵)、精選して50kg俵で45万1,300俵が合格、大豆種子の受付量は76万6,123俵(60kg俵)、

精選・合格量は 50 kg 俵で 70 万 2,761 俵となった。

特殊生産物部門のなかで、農作物ではないが、貯蔵庫網と紡績工場を、その傘下にもっている。

倉庫は 38 カ所、收容能力 72 万 5,554 t、借入倉庫 2、能力 2 万 7,000 t、種子選別所 11 カ所。

紡績工場は、パラナ州アサイに、'89 年建設、営業開始しているが、総投資額 4,000 万ドル、今のところ月 60 t の織物、メリヤス製造にとどまっているがフル操業に入ると、月 500 t の繰綿を処理し、約 430 t の単糸を製造することになる。

直接雇用 600 名、月平均売上げ 300 万ドルの計画がある。

(5) 農産資材、肥料、農薬等の取扱い

'89 年度のこの部門の総配給額は、NCz\$ 8 億 9,990 万で、昨年比 14.2% 減、理由は、農業資本の減少、資材コストの高騰、銀行融資に調達困難、生産者の資材買控え、生産物の低価格など。

これを各部門別にみると次の通り。

〔肥料〕

ブラジル農業は、長い間、無肥料、掠奪型農業で地力の低下にどう対応するかの、問題が起き化学肥料多投で対応してきたが、やはり、即効性はあるとしても、根本的に地力の回復は望めない、との反省から、今日では有機質肥料による土づくりへと視点が変ってきている。しかし、理屈としては理解しえても、それを実践することは非常に難しく、今日なお化学肥料への依存度は高い状態で推移している。

コチア産組は、粒状肥料、配合肥料など 29 万 t 製造のジャグワレー工場、同 3 万 t のサントス工場、粒状袋詰肥料 12 万 t 生産のウベラーバ工場、5 万 t のアツラー工場、硫酸 2 万 t、過燐酸 8 万 t、熔燐 1 万 t の、熔リン工場などでの化学肥料 48 万 t 生産体剰を敷いている。

肥料部の事業分量は NCz\$ 4 億 3,720 万で、伸びてきているが、在庫量も多く、肥料配合量も農産物の価格下落に連動する役割をもつことから順調

にのびるとはいえない。

大豆、米、とうもろこし、綿花は、コスト、融資の面で不利の立場にあって、化学肥料の使用量が減じたが、馬鈴薯部門は堅調な伸びを示した。

最近では「土地づくり」「地力の回復」策として有機質肥料“コペルウムス”を実験的に試作して、地力の弱い土壌での蔬菜栽培にあてる努力をしている。

そのほか、各作物の必要栄養度を測定し、名称にプルスを持つ肥料、例えば“リツゴプルス”“カフェープルス”“アルゴドンプルス”“ミーリオプルス”などの開発にも手を染めてきているが、実用化の段階ではない。

〔農薬〕

農薬の事業量は NCz\$ 2 億 7,590 万で、前年度比 15% 伸び、国内市場全体が伸び悩んでいたのも、コチア産組の販売事業は目立つ存在となった。

農薬は、環境、人間の健康管理の側面から厳しい規制があり、価格等も C I P（政府の価格管理部）の統制下におかれている。価格統制があることは、市場での販売競争が平等な立場でできるものの、製造コストを下まわる価格設定もあり、目下、カーラマ・セトリアル（小部門別委員会）で、この問題を検討している。

戦略としては、新市場の開拓、新栽培作物に適應する農薬の開発、在庫の回転力を早めるなどに力点をおいて、正しい使い方の指導をするなどの努力が、販売額の向上につながった、としている。

〔種苗、種子〕

種苗、種子市場の問題は、一般販売用の穀類を種子に使うケースがあり、市場の読み込みが難しい点がある。特に大豆や米にその傾向がでていたが、全体的にみた種子の配給高は NCz\$7,960 万で、前年度を上まわっている。

種子生産は、直営のアグロフローラがあたっているが、この会社規模はアグロセールスと並んで、ブラジルの業界を 2 分するトップクラスの企業、特に蔬菜種子での知名度は高い。

ここでは 22 種類 80 品種の蔬菜種子が栽培され、商品化されている。

穀粒種子は、72万5,000俵(50 kg 俵)、内訳は、小麦60万3,000俵(50 kg 俵)、とうもろこし、6万2,000俵(40 kg 俵)、綿花5万5,000俵(30 kg 俵)などであるが、はじめて生産販売する種子(Ex. ミーリョBR 201 など)、小麦やとうもろこしの在庫処理など、むずかしい問題があった。

〔農業機械〕

農機のなかで主に取扱っているものは、灌漑用器材、連結機である。マット・グロッソ、ミナス・ゼライス、ゴヤスなど、セラード地域の開発に伴いインゲーション・システムの普及は、急増しているが、なかでもピボー・セントラルの利用は著るしい。数100 m 幅で散水しながら自走するピボー・セントラルは、アメリカ合衆国中西部のプレーリーやグレートプレーズで、最もポピュラーな灌漑施設となっており、今日では、中央ヨーロッパでもよくみかける大型灌漑施設だ。空中からみれば円状の緑枠にみられるが、すべてが円形に自走するのではなく、長方形に灌漑していく場合もある。

購入費用が高価なので、自己資金で賄える生産者はともかく、借入金に依存する場合、政府融資の動向が、施設消費に伸びに大きな影響を及ぼす。

その他、灌漑用器材として、PVC管、鋼管、アルミニウム管、モト・ボンバ、半固定器具、散水機があり、この部門もトータルとして伸びている。

連結機は、いわばトラクターに繋いで使う作業機であり、コチア産組は、'89年度2万機程度配給した。この部門は50%増と最も伸びたところである。

一般資材としては、針金、プラスチック、フィルムなどの部品、容器、袋、木箱、紙器など、小物が多く、配給高も、そう多いものではない。

畜産資材は、肉牛、酪農など大家畜部門担当の組合員が少なく、中小家畜に限定されているため、豚・鶏舎資材を取扱っている程度。

資材部門で特徴的なことは、種子のアグロフローラが100%出資してつくった「アグロエスツファ・インペリメントス・アグリコラス・リダ」なる工場がある。コチア産組からみれば、“孫会社”で、蔬菜種子採取機とビニールハウス用構造材を製造・販売しているが、構造材は直売せず、コチア産組にほとんど納入、卸している。いわば孫受会社だ。

最近はハウス熱が盛んで、'88年8月末現在めで、3,000 m² の資材販売実績があり、主としてサンパウロ近郊やパラナ州向けとなっている。

支柱は、コンクリートと亜鉛メッキ鉄材の2種があり、各農家の希望があれば、同社から専門家が出張、指導する。

採取機の方は、いわば副業だ。

[飼料]

飼料は、家畜用のほか、ペット関係にも乗り出している。

配合が主体で、原料はとうもろこし、大豆滓、小麦ふすま、魚粉、カルシウム、プレミックスで、取扱量は28万tあまり、配給高はNCz\$ 1億4,780万。

金融コストと運賃の高騰など悪条件を克服して、売上げを順調に伸ばしている。新規投資、新製品の開発、市場の拡張が、その背景にあった。

飼料生産はアチバイヤにあるプレミックス製造工場を軸に行い、マジェー、グワタパラなど8カ所配給所を通して、畜種部門別飼料生産を行った。

仕向先は、養鶏、養豚農場が多い。

[種鶏など]

種鶏、孵化場については、以下、表3に示すように、組合直営に、9種鶏場、4契約種鶏場(延べ18万m²)と、4孵化場を使い、約4,000万羽の種鶏を生産した。これは、前年度を4,000万羽上まわる増産である。

表3 コチア産組種鶏の生産状況

種 類	羽 数 (羽)	伸び率 (%) (前年度比)
食鶏ひな	2678万7316	8.0
白卵鶏ひな	527万9110	20.2
赤卵鶏ひな	383万0088	39.7
育成鶏	208万9154	6.7
販売用食鶏	120万0000	166.7
合 計	3918万5668	

(コチア産組'89年度事業報告書)

従って、総配給高においてもNCz\$6,270万で、大幅の伸びとなった。

(6) 外国貿易の実態

ブラジルの輸出内容を、通商白書でみると'85年のベスト10に入っている農産物は、第1位のコーヒーと、7位の植物性油かす、9位の果実ぐらいで、最近の傾向としては機械、鉄鋼、石油製品、自動車など先進国型の工業製品が目立つようになった。中進国から先進国へ、テイク・オフしつつあるようにもみえる。

だが、ブラジルの1、2次産業を面として把えるならば、農畜産物の輸出依存度はいぜん高い水準にある。

コチア産組の輸出部は独立して存在していない。普通生産物販売局には輸出部があるが、特殊生産物販売局にはそれがない。「穀物」、「繊維」、「コーヒー」の3部が、国内販売と兼務している。他に、農業資材局種苗部、財務局も、輸出関連の業務を推進しながら、独立した部はないのである。

こうした複雑な機構の中で、輸出業務を行っているが、それを総合すると、コチア産組の輸出高3,970万ドル、輸入高2,490万ドル('89年)で出超だ。

この年、国内外で、いろいろ問題が発生した。

蔬菜、果実は、為替変更率のズレで、輸出できなかった産物がでたり、国税局、農務省管轄の部局のストライキで、港湾、空港、税関機能がマヒ、損害を大きくした。天候の悪変も、輸出を順調にすすめなかったし、相手国内の事情(Ex. アルゼンチンへのバナナ輸出)で、輸出停止に追い込まれるものもあった。

表4 コチア産組の'89年度・輸出実績

生産物	金額 (単位:ドル)
ソージャ (大豆)	1839万0000
カフェー (コーヒー)	860万1000
アルゴドン (綿花)	372万1000
ファレロ・デ・ソージャ (大豆類)	363万9000
紅茶	121万1000
果実/蔬菜・食鶏	420万2000
合 計	3976万4000

(コチア産組'89年業務報告書)

(7) その他の機関

[指導部] 直接の生産部門ではないが、産業組合にとって指導部門は重要だ。産組内にある 77 の婦人部、57 の青年部に、14 名の専門指導員を配し、「全伯婦人部大会」を開催したり、“青年と農業継続”“土壌保全”“灌漑技術”の講習会を催すほか、スポーツ、農業プロジェクト、文化活動、家政、人間関係、健康、食物などの指導を行ってきている。

[G T C] 共同出荷組合のことで、輸送費の値上りが続くなかで、一般運送業者よりも安い運賃業務を実現した。

組合が保持する、車両数は 89 名、G T C はエウナーポリス、ロンドリナ、ドウラードス、バンバイランテスにも新設されている。

[営業団地プログラム] コチアの営農団地は 73 年、サンゴッタルドをはじめ、サンジョアキンなど 14 カ所のプロジェクトが実施に移された。パダップ、パラカツ、ペルジーゼスなどセラード開発のほかに、ピポーラ、クラサなどサンフランシスコ川流域、その他であるが、新しい地域の立地条件を利用し、近代的で、効率のよい農畜産事業の展開を目標にし、計画進行中が 5 カ所ある。

[基盤完成団地] ○穀物・コーヒー：パダップとサンゴタルト，○りんご：サンジョアキン，○果実・野菜：パッドプラポーラ，○蔬菜：パッド・スール，○蔬菜・果実：デ・フレイタス，○穀物・コーヒー：パッドムンド・ノーボ，プロデセル，○果樹・蔬菜：パッドクラサー，○蔬菜：パッドスールII，穀物・コーヒー：パッド・ペルヂーゼス，○穀物：パッド・オウロ・ヴェルデ，プロデセルII，○蔬菜：パッド・ボツカツ，○穀物：パッド・リアッション・ダス・ネーヴェス，コチア青年団地である。

[P A O，カルリンダ] 農業試験場で、マット・グロッソ州アルタ・フロレスタの 9 万 ha で、米，とうもろこし，フェイジョン豆，コーヒー，カカオ，ガラナの各生産物の試作を行っている。

農地 3 万 6,169 ha を 1 区画 100 ha 農地 154 区 200 ha 53 区，300 ha 35 区に分割，市街地 2,097 ha，試験場 892 ha のブロックとした。

入植地には，小学校，保健所，商品も配置している。

[PAD, ジュアゼイロ] サンフランシスコ川中流域で、ジュアゼイロ市から 18 km 9 地点に、1,944 ha の土地を購入、33 区に分割した。10 区は 70 ha、残りは各 50 ha とした。

現在、6 組合員が入植し、メロン、ブドウ、蔬菜をつくっている。

[PAD, リオ・デ・ジャネイロ] リオ・デ・ジャネイロ市から 60 km のマジェー市グワピミリンにあり、総面積、2,118 ha を 43 区画に分割、目的はリオ・デ・ジャネイロ市に野菜を供給することであるが、とうもろこし、マンジョーカ、馬鈴薯、ブドウ、胡椒、トマト、カキ等も生産している。

[PAD, パルマス] 総面積 726 ha を 31 区画にわけて団地達成した。電化、道路、試験場など、農業生産に必要なインフラ・ストライクチャー部門も整備された。

[PAD, T. デ. フレイタス] バイア州サンタ・クルーズ・ダ・カブラーリア市に 1,424 ha を 23 区分、21 万箱のマモン・ハワイを、生産しているほか、トマト、カキ、メロン、胡椒など、果実、果菜、工芸作物を中心とした団地が動き出している。

[その他] プロジェクト・ピニエイロ、プロジェクト・チアングアーなどもあるが省略。

(8) 財政状態および事業成績の分析

すでに本稿(1)のところで述べた通り、1989 年のインフレ率は 1,765% と異常な高水準にある。ブラジルの異常インフレは、かなり以前から続いており、このことが、貸借対照表や損益計算書などの財務諸表を通して、企業等の利害関係者に財政状態や経営成績を開示する際の大きな障害となることは言うまでもない。コチア産業組合中央会の財務諸表を分析するに当たり、インフレに対して採られている会計上の措置について概観することが必要であろう。

我が国では、第 2 次世界大戦後の異常なインフレに対応するため 1950 年(昭和 25) から 29 年までの間に 3 回にわたって固定資産の再評価が実施さ

れたが、ブラジルでも、1958年の企業の固定資産の帳簿価額の調整が始まり、1964年以降は、ほとんどあらゆる種類の経済活動に通貨調整制度が義務的に実施されている。(1986年に一時中断があったが、翌年に再び復活したもようである) 制度の概要について中川美佐子教授は次のように述べている。(国際商事法務 Vol. 14, No 8 ブラジルにおけるコレソン・モネタリア制度の撤廃について)

1964年3月の革命により大統領に就任したカステロ・ブランコ将軍は、インフレの抑制を最優先政策として掲げ、同年7月16日付法律第4357号を制定して、固定資産の価値修正を義務づけるとともに、減価償却引当金の価値修正も義務づけた。法律第4357号は、また、法人に、運転資本維持のため、課税の対象となる超過利得から控除することを認めた。この場合の運転資本は、現金預金・棚卸資産および債権から債務を差し引いたものであった。

1968年12月30日付法律命令第401号は、運転資本維持のため、課税の対象となる利益から控除すること認め、1974年の法律命令第1338号によって、「運転資本維持積立金」(Reserva para Manutencao do Capital de Giro Proprio)なる勘定が設定された、といわれる。この時から運転資本の計算のしかたが変わり、運転資本は正味身代から固定資産を差し引いて計算されることになった。

1974年の改正以来、貸借対照表に適用される税法上のコレソン・モネタリアは、①運転資本の購買力維持のための積立金の設定、および、②固定資産の再評価を二大支柱としてきた。後者が義務づけられていたのに対し、前者は企業の任意であった。

現行株式会社法(1976年12月15日付法律第6404号)は、株式会社法として初めて、コレソン・モネタリアの規定を導入した。その第185条は、インフレが会社の財政状態および経営成績に及ぼす影響を考慮するため、永久資産(投資・固定資産・繰延資産)の諸項目の取得原価およびこれに対する減価償却引当金等と、正味身代の諸勘定残高すなわち資本項目とを、

連邦当局の認める邦貨価値下落係数に基づいて修正し、これらに対する価値修正の相手勘定残高を、当期利益の勘定に振り替えるものとしている。

この他にも多くの経済活動に対して通貨調整がなされているようである。私は、ブラジルの会計制度に関する研究者でなく、また十分調査する時間的余裕も機会も得られなかったので上記以上の詳細は不明である。さらに、一般企業でない産業組合中央会に対して、具体的にどのような方法で適用されるのかということに関しても不明である。最大の救いは、世界的に有名な、プライス・ウォーターハウス会計監査事務所が監査を行っており、かつその意見書が、「上記財務諸表は1989年12月31日現在におけるコチア産業組合中央会の財務状態および、同日に終了した年度の事業成績、純資産の変動および資金の源泉と運用を明確に映し出しており、一般に認められている経理原則が同一基準で適用されている」ということである。

以上を前提として、コチア産業組合中央会の1989年の財務諸表を検討してみよう。

まず損益計算書をみると、収入は組合員生産物の販売及び資材配給高3,017百万クルザード・ノーボに対する手数料収入と思われる。収入合計のうち販売業務収入55.8%、購買業務収入41.0%、その他収入3.2%となっている。また支出は、事業経費が収入合計に対し82.5%、管理経費が4.3%、計86.8%となるが、このうち組合員外取引経費が12.7%含まれているので、差引74.1%が事業・管理経費となる。したがって、収入合計100%から事業経費、管理経費74.1%を控除した25.9%が、当中央会本来の事業活動に伴う剰余となる。これから財務経費24.9%を差引いた1%が組合員取引剰余である。事業成績の良否を判断するためには、過去の実績と比較して検討することが必要であるが、その資料がないので、掲載されている1990年度見積損益計算書と比較することにする。

表8は、1989年度実績と1990年度見積とを構成比率によって比較したものである。この表で注目すべき点は、第1に収入合計から事業・管理経

表 5 貸借対照表(I)

1989年12月31日現在

単位：NCz\$

資 産 の 部		
流 動 資 産		
現金および銀行預金		117,845,678
地 域 組 合 勘 定		5,984,932
組 合 員 勘 定		
販 売 仮 渡 金	891,635,202	
共同計算経費立替金	340,899,101	
資 材 売 掛 金	387,855,335	
特 殊 貸 付 金	545,124,020	
そ の 他 貸 付 金	121,122,343	
生産物未払金(差引)	(350,034,144)	
貸倒引当金(差引)	(4,457,054)	1,932,134,803
外 部 勘 定		
売 掛 金	248,694,256	
そ の 他 未 収 金	31,579,820	
貸倒引当金(差引)	(2,586,603)	277,687,473
棚 卸 資 産		959,625,959
雑 資 産		182,031,925
流 動 資 産 合 計		3,475,310,770
長 期 流 動 資 産		
割賦未収金 その他		1,898,725
固 定 資 産		
有 形 固 定 資 産		
不 動 産	365,777,433	
営 業 用 資 産	287,256,786	
車 輜	33,569,931	
工 事 中 諸 施 設	468,346,534	
管 理 用 資 産	13,068,685	
累積減価償却費(差引)	(1,685,206)	
	1,166,334,163	
投 資 勘 定		
外 部 勘 定	2,047,929	
繰 延 勘 定		
繰 延 費 用		
償還累積額 NCz\$12,531差引	39,320,340	
	1,207,702,432	
通貨価値修正勘定	2,559,360,311	3,767,062,743
資 産 の 部 合 計		7,244,272,238

業務報告にみるコチア産組の経営実態

表5 貸借対照表(2)

1989年12月31日現在

単位: NCz\$

<u>負 債 の 部</u>		
流 動 負 債		
組 合 員 勘 定		
組合員仮受金	69,334,494	
特別借入金	325,100,032	
その他借受金	38,882,780	433,317,306
銀 行 勘 定		
農業融資借入金	428,514,220	
銀行貸入金	2,164,610,981	
未使用融資金	(32,103,530)	2,561,021,671
外 部 勘 定		
買掛金	198,622,485	
有給休暇保留金	103,925,266	
その他未払金	98,919,631	401,467,382
官 庁 勘 定		44,284,838
流動負債合計		3,440,091,197
長 期 流 動 負 債		
銀 行 勘 定		
農業融資長期借入金	116,056,402	
借入金	628,501,662	
	744,558,064	
その他借入金	645	744,558,709
前 受 収 益 勘 定		
前受利息その他		792,280
資 本 勘 定		
出 資 金 勘 定		
出資金	29,152,440	
増資積立金	609	
	29,153,049	
準 備 金 勘 定		
法定準備金	58,775	
開発準備金	146,966,183	
施設投資準備金	316,192,012	
	463,216,970	
積 立 金		
技術教育福祉積立金(FATES) …	260,193	
特別積立金	87,292	
組合員事業積立金	1,186,297	
	1,553,782	
当 期 剰 余 金		
組合員取引剰余金	5,316,274	
法律第5764号による剰余金	249,666	
	5,565,940	
	499,469,741	
通貨価値修正結果準備金	2,559,360,311	3,058,830,052
負債の部合計		7,244,272,238

表6 1989年度 損益計算書

単位：NCz\$

組 合 員 取 引		
収 入		
販売業務収入		282,473,404
講買業務収入		207,596,974
その他の収入		15,998,946
合 計		506,069,324
支 出		
事業経費		
人件費	294,085,988	
諸経常費	111,812,797	
償却費	11,529,433	417,428,218
管理経費		
監事会経費	356,783	
理事報酬	2,165,454	
人件費	12,238,796	
諸経常費	6,857,490	
償却費	68,136	21,686,659
組合員外取引経費(差引)		(64,205,952)
		374,908,924
財務経費(受入分 NCz\$		
3,584,880,114差引後)		125,844,125
合 計		500,753,050
組合員取引剰余金		5,316,274
法律第5764号による剰余金		
所得税差引前剰余金	364,476	
所得税(差引)剰余金	(114,810)	249,666
当期剰余金		5,565,940
剰余金処分		
法定準備金 10%	531,627	
技術教育福祉積立金 5%	265,814	
特別積立金 10%	451,883	
出資金利子 年12%	368,498	
総会において処分すべき額	3,698,452	
	5,316,274	
法律第5764号による剰余金	249,666	5,565,940
組合員生産物販売額と組合への資材配給額		3,017,015,114

業務報告にみるコチア産組の経営実態

表 7 事業分量比較

単位：NCz\$ 1,00

	1990年度予算	1989年度実績	増 額	増率(%)
普通生産物販売高	19,550,215,553	850,116,942	18,700,098,611	2199,7
特殊生産物販売高	17,361,839,997	908,889,198	16,452,950,799	1810,2
販 売 高 合 計	36,912,055,550	1,759,006,140	35,153,049,410	1998,5
配 給 高 合 計	26,348,319,163	1,258,008,974	25,090,310,189	1994,4
総 計	63,260,374,713	3,017,015,114	60,243,359,599	1996,8

表 9 1990年度 見積損益計算書

単位：NCz \$ 1,00

組 合 員 取 引	
収 入	
販 売 業 務 収 入	6,657,570,077
講 買 業 務 収 入	3,795,063,148
そ の 他 の 収 入	383,696,093
合 計	10,836,329,318
経 費	
事 業 経 費	
人 件 費	9,335,960,534
諸 経 常 費	977,404,921
償 却 費	224,527,054
小 計	10,537,892,509
管 理 経 費	
監 事 会 経 費	7,487,000
理 事 報 酬	59,237,000
人 件 費	448,098,823
諸 経 常 費	92,737,800
償 却 費	1,191,726
小 計	608,752,349
組合員外取引経費(差引)	1,927,786,249
経 費 合 計	9,218,858,609
財 務 経 費	25,757,520,197
受 入 分 差 引	24,288,289,520
実 質 財 務 経 費	1,529,230,677
経 費 総 計	10,748,089,286
組合員取引剰余金	88,240,032
組合員外取引剰余金	28,993,936
合 計	117,233,968

費合計を差引いた組合の本来の活動から得られる剰余である。1989年度実績 25.9% (100%－74.1%) に対して 1990年度見積は、14.9% (100%－85.1%) と大幅に低下する見込みであるということである。この要因は、表中で明らかなように人件費比率の大幅な伸びにある。

表 8 組合員取引損益構成比率比較

項 目	1989年度実績(%)	1990年度見込(%)
収 入		
1. 販売業務収入	55.8	61.4
2. 購買業務収入	41.0	35.0
3. その他収入	3.2	3.6
合 計	100.0	100.0
支 出		
1. 事業経費	82.5	97.3
(うち人件費)	58.1	86.2
2. 管理経費	4.3	5.6
小 計	86.8	102.9
3. 員外取引経費	▲ 12.7	▲ 17.8
事業・管理経費合計	74.1	85.1
4. 財務経費	24.9	14.1
剰 余 金	1.0	0.8

第2の点は、財務経費比率の変動であり、1989年度実績24.9%から1990年度見込14.1%へと大きく低下している。1989年度の財務経費が何らかの事情で大きくなり、1990年度には改善される見込みなのか、あるいは、1990年度見積の段階で調整されたものなのか。

以上のことから、コチア産業組合中央会の1989年度の事業成績は、利益を目的とする事業体でないことから、概ね良好であったと判断される。しかし、1990年度との比較で明らかなように、極めて不安定な経済状況を反映した不確定（不安）要素を内包したものといえよう。

つづいて貸借対照表より財政状況について検討してみる。

貸借対照表については、1990年度見積も過去のものも入手できないので、十分な分析は不可能である。しかし財務状態についての報告の中で次のように説明している。

「生産物の生産者は他から資金を調達することも出来ず、資本減少を来して破産に瀕していたため、組合はその援護をせねばなりませんでした。加えて政府が実質的に公式融資を廃止してしまい、他の生産者も融資を受ける道を閉ざされ、組合はその生産活動を継続させるため、未収穫生産物と資材とを交換する融資制度をとり、生産者に代って銀行から資金を調達し直接の借入主となったのであります。」(1989年度、事業報告書)

このことから考えると、1989年度末の財政状態について特に指摘すべき事項もないが、組合員に対する販売仮渡金(892百万 NCz\$)、資材売掛金(388百万 NCz\$)、特殊貸付金(545百万 NCz\$)等の組合員勘定が1,932百万 NCz\$(これは、流動資産全体の55.6%に当たる)の回収可能性に不安が残る。

また、負債については、金融機関からの短期借入が2,561百万(これは、流動負債合計の74.4%に当たる)にのぼり、したがって、流動資産から資金の流入が順調に進まないかぎり借入金返済のための資金繰りに窮することもあると考えられる。

資本勘定については、負債・資本合計の42.2%に当たるが、このうち35.3%は通貨価値修正によるものであり、資本勘定比率の高いことをもって財政が健全であるということも出来ない。

以上を総合すると、コチア産業組合中央会の1989年度の経営成績および財政状態は、損益計算書及び貸借対照表からみれば特に問題がないと判断されるが、これらの財務諸表に表れていないブラジルでの経済的背景を含めて考えると、今後の厳しい状態が推察される。

(9) おわりに

’90年3月、30年ぶり、国民の直接選挙で選ばれたフェルナンド・コロール新大統領は、インフレ抑制のための経済再建計画を発表、税制改革、通貨統制、行政機構の変更、物価抑制、賃金政策、国家事業の民営化、公務員の削減などを打ち出し、三桁デノミネーションを実施した。通貨はクルザード・ノーボに変わって、再びクルゼイロが復活した。

サイネイ前政権時代、毎月100%を起すインフレで悩まされ続けたブラジル事情は、新コロール、プランで、果してインフレ抑制が可能なのか。

「ブラジルの奇蹟」は、第二次世界大戦中から半世紀にわたる、第一次産品の輸出急増と輸入減少による大量外貨蓄積を背景に、外資の大幅導入、工業化偏重、大量の通貨発行の結果として招来したものである。著しい経済発展の裏側で、破局的インフレが進行する矛盾を抱えながら、農業政策でも、政府融資の停止や、輸出入のコントロールによる市場操作を行い、生産者側には、農業の将来予測をしにくい状況が生まれている。

こうしたブラジルの政治、経済を背景に、コチア産業組合が、組合員の生産意欲を失わせず、生産力を高め、安定的な販・購売を実施してきていることは注目すべきであろう。

南米最大の農協は、組織規模が大きく、多岐の部門で生産、流通部門を掌握しているにも拘わらず、その動きはスムーズで、手ぬかりなく進んでいる。^(注4)

コチア産組の出発点は、日本の大正、昭和初期に彷彿としておこった“産業組合運動”の原点に、その思想があるように思われる。^(注5)

つまり、“資本の搾取、収奪から、農民・生産者を護る”ことに基本をおいた組合運動なのである。ややもすれば、日本の農協は、官僚化し、商社化している傾向もあるが、ここブラジルの日系産組コチアは、原点を守りつづけているようにも思われる。

指導、販購、厚生、信用のほかに、多くの傘下企業を有し、営農団地を造成し、外国貿易にもタッチするなど、一単協、総合農協の性格のうえに、経済連、全農機能も有しながら、経営は民主的で、組合員本位の運営をし

ているところに興味をひかれる。

コロール政権は、“農業者は、国の援助、補助や農畜産物の価格支持政策なしで、経営できる体系をつくるべきだ”として保護政策をとらない方針を既にほのめかしていて、自由競争原理を市場経済に導入するかまえである。

こうした状況の中では、コチア産組の相互扶助精神はますます重要視されてくるに違いない。

注欄

- 1) 進藤賢一「コチア産組と農業移住者」飯島源次郎編著『転換期の協同組合』筑波書房1991. 2. 発行P. 115～134で詳細に取扱っている。
- 2) 進藤賢一「ブラジル農業の変貌過程」——パラナ州農業地域の分析を中心に——『札幌大学教養部紀要』No22. 1983. 3. 参照
- 3) 高橋晃平「インデクセーションの導入と、インフレへの対応効果について」——ブラジルを例に——『拓殖大学論集』第186号平成2年, 10月, (P. 111～137)
- 4) 進藤賢一「コチア産組の仕組とブラジル農業」『札幌大学産業経営研究所紀要』No. 8 1991. 3
- 5) 進藤賢一「今、何故農村リーダー論か」——農村リーダーに期待されるもの——『北方農業』1983. 8. P. 4～8

参考文献

- 1) 『コチア産業組合中央会, 1989年度事業報告書』CAC.
- 2) 『コチア信用組合(CRCR) 1989年度事業決算報告書』(CAC-COOPERATIVA REGIONAL DE CREDITO RURAL LADA)
- 3) 『コチア聖南西農業協同組合, 1989年度事業報告書』
- 4) 『AGRO-NACENTE』JUL. AGO. 1987 EDIÇÃO 34.0』
『同 NOV. DEZ 1990 EDIÇÃO 54.9』『同 NOV. DEZ 1990 EDIÇÃO 53』
- 5) 進藤賢一「アサイ・ロンドリナの農業と日系人社会」——トレスバラス移住地を中心に——『札幌大学産業経営研究所紀要』No. 2, 1983. 3
- 6) トレスバラス移住地50年史編集委員会『トレスバラス移住地50年史』1982. 5. パラナ新聞社
- 7) フレデリック・モーロ著, 金七紀男, 富野幹雄訳『ブラジル史』白水社, 1980. 3
- 8) 塩田長英『ラテン・アメリカ』——その光と影——新評論, 1977. 11
- 9) 西川大二郎「ラテンアメリカ農業研究の視角」『ラテン・アメリカの農業構造』アジア経済研究所

- 10) ピエール・モンベーク著，山本正三，手塚章訳『ブラジル』白水社，1981. 7
- 11) 日本貿易振興会『ブラジル』官報販売所，1985. 6
- 12) 斉藤広志『新しいブラジル』サイマル出版
- 13) 半田知雄『移民の生活の歴史』——ブラジル日系人の歩んだ道——サンパウロ人文科学研究所，1970. 6
- 14) F. ジュリアン著，西川大二郎訳『重いくびきの下で』—ブラジル農民解放闘争—
- 15) 佳山良正編『ブラジルの日系農家』兵庫農科大学，ブラジル移民調査団派遣委員会，藤本印刷，1967. 10
- 16) サンパウロ人文科学研究所，研究レポートⅦ『ブラジル日系社会のいぶき』——日本移民70年記念論集——，実業のブラジル社，トッパンプレス社，1978. 6
- 17) 柴田銀次郎，西向嘉昭「ブラジル農業と農業政策」『ブラジルの経済構造』アジア経済研究シリーズ22，アジア経済研究所，1968. 2